

【書評】

外川継男著『サビタの花 ロシア史における私の歩み』を読んで

成文社、2007年、414ページ

安井 亮平



外川さんが、19世紀ロシアの社会思想史と日露関係史において秀でた業績をあげられたことは、ここで改めて触れるまでないだろう。本書でも、「日露・日ソ関係の特徴」、「長崎のレザノフ再考」、「明治維新前後の日本人のロシア観」や、「チャアダーエフの墓をたずねて」、「ニースのゲルツェン家の墓」、「ドイツ系ロシア人としてのケーベル先生」などの各章で、その豊かな学殖の一端に接することが出来る。

「私の最終講義」と巻末の「略歴と著作年譜」を見ると、外川さんが、日本の研究者として最も正統的な道を歩み続けられたのが、よく分かる。わが国では、ロシアおよびソ連が日本でおかれた特殊な事情のため、「イデオロギーに左右されないアカデミックな態度を貫くことにつとめ

てきた」（「まえがき」）ロシアに係わる機関や研究者は、殊に外川さんが研究者として歩み出した1950年代には、ごく少数にすぎなかった。

しかし、反面、正統的な研究者には得てして独特の体臭や狭さや堅さが見られたのだが、外川さんはその正反対で、神田生まれらしく気さくで、柔軟である。

本エッセイ集は、そのような外川さんをうんだ土壌と背景を率直に語ってくれる。

本書でまず魅力的なのは、随所に見られる濃やかな人間観察である。学生時代に一時フランスのモラリスト研究を志しただけある。取り分け「梅林の中の家」がすばらしい。未知の北海道へ大学院の入試を受けに行く23歳の「私」は、たまたま列車で乗り合わせた「30歳くらいの女性」の申し出で、入学後その家に下宿することとなる。家は札幌の町外れの梅林の中にあった。大家さん一家の事情や他の下宿人たち、中でも親しくなった彫刻家の若夫婦のことなど、この家で暮らした3か月間の生活と人間模様が、23歳の青年の眼差しからいかにも若々しく瑞々しい筆致で、濃やかに描写される。1950年代中ころの雰囲気もよく伝えられている。さながら好短篇の趣きがある。

外川さんは、希有なことに、時間的にも空間的にも大きな、複数の尺度の持ち主で、それが主著の『ロシアとソ連邦』で威力をあらわし、見事な成果をあげたのだが、その複眼的視点は決して一朝一夕で創り上げられたわけでない。本書が示すように、多年の倦まぬ探求と努力の結実であった。アメリカとフランスでの留学、フランスの優れたロシア研究者ブザンソンやボナムールや、ソ連のラーゲリに20年余り収容され、のちに名著『強制収容所註解事典』や『さまざまな生の断片』を著わしたロッシなどとの永年の親交、ワルシャワでの1年間の日本語教授、それにロシア、フランス、アメリカ、ポーランド、グルジア、ウズベキスタン、コディアク島などなど、実にさまざまな国や地域への訪問およびそこでのいろいろな人々との出会い、そうした見聞や体験（主として本書のIVとVに収録された文章）の結果、外川さん独自の視点が可能となったのである。ただ、親交を結んだ人々の中に、研究対象のロシアで生まれ育った人がひとりも含まれ

ないのは、現場第一主義の私には、なんとも不思議な気がするのだが。

本書は次のような文章で結ばれる。「…二つの癌が早期に見つかり、よい医師、よい看護師に恵まれた私は幸運だったと云えるだろう。しかし、Dame Fortune（運命の女神）は嫉妬ぶかいというから、自分の幸運を鼻にかけていると、いつまた不運がおそってくるかも知れない。手術のあと、私はこれからの人生をできるだけ目立たないように、生きていこうと思っている。」外川さんの現在の心境を語る、実に重いことばである。

3人の恩師に捧げた文章で、外川さんは、「…だれもが認める古代史の権威であったが、学位も、位階・勲等もすべて固辞され、身内の方だけに見送られて、あの世へ旅立たれた」のに、「まことにすがすがしい身の処し方」だ、さすがと感嘆したり（「ある歴史学者の死」）、叙勲を予め断わった、全く「ハツタリ気のない」ロシア史専攻の先生に、その死に際し改めて敬服したり（「鳥山先生の思い出」）、あるいは、モラリストを研究した旧師の生き方に心魅かれるものがあるとも記している（「土居寛之先生のこと」）。

結びのことばは、これら3人の恩師に寄せる外川さんの深く熱い思いと通底しているように、私には思えるのだ。

パールィシェフ・エドワルド著『日露同盟の時代 1914～1917年』

福岡、花書院、2007年、394ページ

人の顔をもつ国際関係論

中村 喜和

今わが国で、ロシアは評判がいいとはいいがたい。インターネットに発表された日本政府のアンケート調査によると、ロシアに多少とも親しみを感じる日本人は16.2%だった。それに対して親しみを感じないと答えた者は77.6%にのぼった。さらに現在の日露関係を良好と意識する日本人は28.2%であり、良好ではないと見る者は56.8%であった、という。

しかし、日本とロシアの関係はいつもそれほど険悪だったのだろうか。確かに20世紀には、両国は2度も武器をとって戦った。シベリア抑留の経験をもつ旧日本兵が60万人もいた。とはいえ、外交関係をもちはじめてから1世紀半のあいだ、二つの国は海をへだてて絶えずにらみ合っていたわけではない。稀にはあるが、仲良く手を握った時期もあったのである。1914～1917年は第一次世界大戦の期間である。このとき、日本とロシアは歴史上はじめて同盟国になった。手を取り合って、ドイツと戦ったのだ。ここで取りあげる書物はその稀有な時代をテーマにした研究である。著者は九州大学に留学して研修を積んだロシア人であるが、日本語で書かれていることが、まずうれしい。

題名から判断して日露友好の時代を謳歌した本かと勘違いしてはいけない。副題に《「例外的な友好」の真相》とあることからわかるように、「日露同盟」の本質を解明しようとした、あく

